

戦時中の食事

・食材の配給制



戦争が長引く中で、米は 1941(昭和 16)年から配給制になりましたが、最初は精米だったものが次第に五分搗き米、玄米になっていきました。これは配布の時の嵩増しのためでしたが、下痢をする人が多く、一升瓶をつかって精米する方法が流行しました(左図)。

こうした精米作業は子どもやお年寄りが担うことが多かったのですが、2 時間ほどつき続けなければならない大変な作業でした。平和資料館では、精米作業の体験ができるコーナーを設けています。

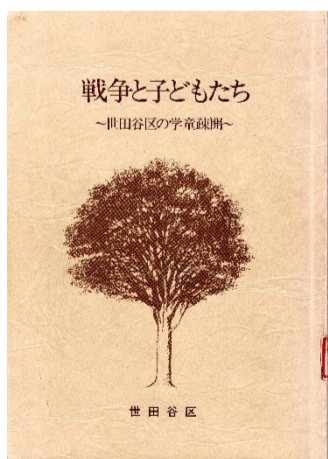
・代用食



米が配給制になり、量も制限されるようになる中で、麦やそば、いも、雑穀など、ご飯の代わりに主食として食べるようになった食品を代用食といいます。戦争が進むにつれて、小麦に海藻やとうもろこしの粉、茶殻の粉などを混ぜて焼いたパンなど、代用食自体も代用品でまかなわれるようになっていきました。(左図は当時の食事のレプリカ)

空腹を癒すために、こんなコミカルなことをやった思い出がある。エビオスならば学童でも買える薬店があるとの情報を入手し、数人で小遣いを捻出しあって、たしか五百錠入りくらいの瓶詰を買って、等分に分け合って、おやつ気分です。直後は多少の満足感を味わえたが、消化薬とは露知らず、夕食の待ち遠しかったこと。

「戦争と子どもたちく世田谷区の学童疎開」



30 ページより

食料不足は子どもたちにも重くのしかかりました。おやつ感覚で、ほんのり甘い薬を口にしたら消化薬や整腸剤で、もつとお腹が空いてしまった、なんてことも。今では笑い話のようですが、当時の子どもにはとても深刻な問題で、常にお腹が空いていたというお話も聞きます。